

「悔い改めよ、私は戸口に立って、たたいている。」

見よ、私は戸口に立って、たたいている。だれか私の声を聞いて戸を開ける者があれば、私は中に入ってその者と食事を共にし、彼もまた、私とともに食事をする。

(黙示録3の19-20より)

Behold, I stand at the door and knock; if any one hears my voice and opens the door,
I will come in to him and eat with him, and he with me.

主イエスは、言われた。求めよ、そうすれば与えられる。門をたたけ、そうすれば開かれると。私たちが、さまざまの問題に直面して苦しむとき、そこからどうしてこのような問題が起こったのかと、神に対して門をたたき思いをもって求め続けていけば、いつかは必ずその意味は何かのかたちで与えられる。そしてその困難を乗り越える道が開け、歩む力をも与えられる。身近な周囲の自然に接してもたえずその自然のすがたの意味を問い続けるときには、たしかに新たな意味が示される。

今日の「戸口に立ってたたいている」というみ言葉は、主イエスご自身が私たちの魂の扉をたたいているという上のこととは逆方向のことである。それは、私たちの心がほとんどいつも閉じられているからである。私たちの魂は、霊なる主に向って門をたたき心とともに、私たちに向ってたたいておられる主への霊的感受性を深め、鋭くしていくことが求められている。聖書そのものが、神が私たちに対して心のとびらを開くようにとたたいている。また、日常に生じるさまざまの出来事も、苦しいことも喜ばしいことも通して、みな神が私たちの心をたたいておられる姿でもある。

私たちが心の扉を開けるときには、主イエスが私たちの魂のうちに入って来てくださって食事を共にするという。それは、霊的な食物、御国の食物やいのちの水をともに与えられるということを示している。しかし、心のとびらを閉じているならば、さまざまの困難な出来事や悩みは、そのまま心に沈み、だんだんと活力を失っていく。あるいは、この世の悪しきことが入り込んでくる。

最初の「見よ」、という言葉が英訳の代表的な一つは、通常訳とちがって Listen! (聞け!) (*) と訳している。霊の目で見ると、私たちの心の扉をたたき主のお姿が浮んでくるということであるが、それは他方では、霊の耳をすまさないとその呼びかけは聞こえてこないという意味を持っているゆえにこのようにも訳されている。

上記の聖句の直前に、「悔い改めよ」、という言葉がある。悔い改めとは、神に向って心の方角を転じること、そこに神からの呼びかけを聞き取ることができるようになる。

私たちが日々、神様の扉をたたき、また神様のほうも私たちの心の扉をたたいてくださっているということをいつも意識して歩みたいと思う。そこから新たな道が開かれ、私たちがさらなる主との霊的な交わりを与えられていくからである。

(*) 原語のギリシャ語は、イドゥー idou! であり、eido 見る という言葉からきている。



ヒヨドリバナとアサギマダラ 伊吹山（標高 1377m）にて 2010.8.6

ヒヨドリバナは、比較的高い山によく見られる花でそこに、このように折々にアサギマダラという美しいチョウが来ているのをみかけることがあります。このチョウは数ある花々のうち、このヒヨドリバナやこの仲間の花に多く見られ、この花の蜜が好みなのだとわかります。このヒヨドリバナは写真のような白い花ですが、やや赤

紫の色を持っているのもあり、秋の七草として知られるフジバカマや山地に見られるヨツバヒヨドリ、湿地に生えるサワヒヨドリなどがその仲間です。この写真は、岐阜県と滋賀県の県境にある伊吹山の山頂近くで撮影したものです。

アサギマダラは、遠くまで飛来するチョウとして有名で、1,500 km 以上も飛んだもの、さらに、1日に 200 km も飛んだという記録もあります。

以前、わが家のある山の頂上から羽に印を付けて放たれたアサギマダラが、九州南部の島で捕獲確認されたということが報道されていたのを思い出します。アサギマダラはひらひらと優雅な飛び方をし、人をあまり恐れず近くにいても逃げないことが多いのです。この柔らかな羽でいかにして、山々を越え、風の吹きつる海を越えて数百kmも飛来できるのか、信じがたいようなことです。神の創造の不思議を思います。

わが家は海沿いの山を少し登ったところにありますが、そうした渡りの途中のアサギマダラが、毎年のように見られます。今年も、咲き始めたツワブキの花の蜜をすっていたのを見かけました。私たちが弱く力のないものであっても、神の力を受けるときには、霊のつばさが与えられ、困難をも乗り越え、死の陰の谷をも越えていくことができるのを思ったことです。人にはできないが、神にはなんでもできる—その驚くべき神の力が、困難に打ち倒されそうになっている方々のところにも注がれますようにと願っています。

(写真、文とも T. YOSHIMURA)